

厚生文教委員会行政視察報告書（令和8年7月7日～9日）

日 時：令和8年7月7日（火）
視 察 先： 秋田県横手市
視察事項：「所管事務調査：魅力ある図書館の在り方について」-横手市の図書館事業並びに最新の図書館 DX、地域振興策について
令和6年、横手駅前再開発事業に伴い開設された「横手市生涯学習館 Ao-na（あおな）」を訪問。本施設は、まちの中心部におけるコミュニティ醸成の場として、横手図書館を主要施設とする新たな公共施設として誕生したものである。施設は3層構造となっており、多世代のニーズに応える工夫が随所に見られる。1階の「コミュニティスクエア」には、バスケットボールやダンス等に使用できるアクティブエリア、10代向けの自習スペースであるティーンズエリア、100席規模のスタジオ、セルフカフェを備えたラウンジエリアが配置されている。2階の「一般図書フロア」には、一般閲覧室のほか、読書に集中できる「しずかな部屋」、漫画コーナー、レファレンスブース等の多様なスペースが設けられている。3階の「児童図書フロア」には、児童書に加え、読み聞かせ用の「おはなしのへや」や、子どもたちが自由に出入りできるヘキサゴンスペース等が整備されている。施設整備に際しては、中高生を中心としたワークショップを実施し、必要なサービスやエリア・備品等に関する意見を吸い上げ、実際の運営に反映させている。その結果、多くの学生に日常的に利用されており、試験期には夜遅くまで学生で賑わう状況となっている。 また、図書館運営におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）も強力に推進されている。ICタグを活用した自動貸出・返却システムに加え、民間事業者と共同開発したAI搭載の蔵書点検ロボット「あおーニャ」を導入。これにより、従来1年に5日間を要していた蔵書点検がわずか1日で完了するようになり、開館日の増加を実現している。 横手市では「図書館バージョン3.0」という独自のビジョンを掲げて最新テクノロジーを活用した情報提供に挑戦するなど、生涯学習と図書館機能が融合した一体的な運営を展開している。
視察を終えて 魅力ある図書館の在り方について市の担当者に伺ったところ、「市民ニーズに合った選書と蔵書構築」「リクエスト制度やレファレンスの充実によるニーズ把握」「ライフステージに応じた課題解決のための情報提供」「作家と市民の交流など、出会いの場の創出」といった明確な運営方針が示された。 最新技術の導入による徹底した業務効率化と、市民（特に若年層）の意見を反映した居場所づくりを見事に両立させ、地域コミュニティの核として機能している点は高く評価できる。「図書館バージョン3.0」を体現する横手市の先進的な取組は、これからの新しい公共施設の在り方を示す好事例であり、本市の施策検討においても大変有意義な視察となった。

※視察の資料等については、議会事務局に保管してあります。

厚生文教委員会行政視察報告書（令和8年7月8日）

日 時：令和8年7月8日（水）
視 察 先： 山形県村山市
視察事項：「所管事務調査：魅力ある図書館の在り方について」-村山市の図書館事業並びに市民協働によるまちづくり、独自の読書推進策について
村山市立図書館は、平成22年5月29日にオープンした村山市総合文化複合施設「甕葉（しょうよう）プラザ」内の中核施設である。同プラザは楯岡中心市街地活性化の中心事業として整備され、ホール、子育て支援施設、カフェが併設され一体的に運用されている。 図書館の運営は直営である。一昨年には専門的知見の必要性から、司書の採用を実施。開館時間は夜9時までで、駅に近接している利便性から、学生が学校帰りに立ち寄り閉館時間まで学習に励むなど、若い世代に積極的に利用されている。また、地域の活性化に資する取り組みとして各種イベントとの連携も図り、コスプレイベントとの連携なども行われた。 村山市は、同館の開設と同時に自治体としては先進的な「読書シティむらやま宣言」を発し、特に子どもたちの読書活動推進に注力している。ブックスタート絵本プレゼントや新小学1年生への「はじめの一冊」、7カ月・1歳児健診での読み聞かせのほか、借りた本の金額が記帳される「ほんのつうちょう」（読書通帳）などを実施。特筆すべきは、山形県アニマルセラピー協会の協力を得て年3回実施されている「読書サポート犬」の取り組みで、不登校やコミュニケーションを苦手とする子どもが訓練された犬に読み聞かせを行う活動であり、対象児童への直接的なチラシ配布も奏功し、参加後の児童の表情が和らぐなど確かな手応えを得ている。 さらに新たな試みとして、山形市等との広域連携による電子書籍の導入も開始された。また、広い市域をカバーするため移動図書館を巡回させ、学校や高齢者施設等での利用を促進している。地域資料の提供においては、薄くて読みやすくカラー写真を多用した「村山市の歴史」シリーズを現在18号まで発刊しており、児童の調べ学習などにも活用されやすい工夫がなされている。
視察を終えて 新図書館の整備を契機とし、全小学校児童が図書カードを所持し、日常的に図書館を利用できる体制が構築されていた。幼少期から本に親しむ環境づくりへの自治体としての熱意が随所に伺えた。特に、「読書サポート犬」などの心理的安全性に配慮した取り組みや、厚い活字主体の「市史」ではなく子どもにも手に取りやすい地域資料の作成など、利用者目線に立った施策展開は優れた取組である。司書の配置、電子書籍や移動図書館など、市全体で読書活動を推進していく意識が共有されていると感じた。 ハード面での工夫、地域イベントとの連携、子どもたちの読書活動の多角的な推進など、今後の東大和市における魅力ある図書館づくりや教育施策において、大いに参考とすべき事例であると考えます。

※視察の資料等については、議会事務局に保管してあります。

厚生文教委員会行政視察報告書（令和8年7月9日）

日 時：令和8年7月9日（木）
視 察 先： 山形県米沢市
視察事項：「所管事務調査：魅力ある図書館の在り方について」-米沢市の図書館事業並びに多機能連携による賑わい創出について
訪問した「ナセBA（よねざわ市民ギャラリー・市立米沢図書館）」は、1階に市民ギャラリー、2階以上に図書館を併設した複合施設として平成28年に開館。米沢市の図書館は財団法人から市へ移管された経緯があり、現在も「市立米沢図書館（米沢市立図書館ではない）」という名称が使われている。前施設の狭隘化と蔵書数の課題を解消するため、中心市街地再整備計画に伴い現在の形へと建設された。当初は広場の活用を巡る市民の意見の対立があり、店舗立ち退きの難航、東日本大震災に伴う資材高騰や大雪による工期遅れなど多くの困難があったが、現在では多くの市民に利用されている。 本図書館は「歴史に学び、今を生き、未来を創る市民の図書館」を目指す姿として掲げている。特に地域特性を活かした郷土資料の活用に注力しており、上杉家伝来の文書や藩校興譲館伝来の古典籍など、約4万点に及ぶ貴重な古文書を保管・提供している。資料のデジタル化とホームページでの公開も進めている。また、館内には郷土資料調査室と有人レファレンスカウンターを設置し、「ふるさと歴史」や「古文書読解」などの講座を30～40年にわたり継続実施している。 施設の指定管理は「公益財団法人米沢上杉文化振興財団」が担っており、有資格者である専門家が継続して業務に従事できる体制が強みとなっている。また、子どもの読書活動推進として、ブックスタートや絵本専門士による蔵書活用、「本のしろく通帳」などを展開。さらに自動車文庫「アタゴオル」が市内73か所（学校、老人福祉施設、コミュニティーセンター等）を巡回し、多世代に読書の機会を提供している。 市民協働の取り組みとしては、1年登録制の「図書館サポーター」制度や、夏休み限定の「ティーンズ・サポーター」制度を設け、図書修理やイベント補助、おすすめ本のPOP作成などを行っている。
視察を終えて 館長が語られた「魅力ある図書館」の定義は「知識・情報の拠点」「余暇と生涯学習の充実」「居心地のよい環境」「安全安心・丁寧な接客・魅力的な企画」の4点で、図書館の在り方を考える上で重要な視座だと考える。 中心市街地に複合施設を整備し、市民ニーズに応える拠点を創り上げた事例であった。また、指定管理者制度の利点を活かした専門スタッフの継続雇用や、郷土資料の積極的な公開・活用、自動車文庫を通じた福祉施設へのアウトリーチなど、ソフト面の充実が事業の価値を高めている印象を受けた。 東大和市でも、今後の公共施設再編に伴い、図書館を含めた複合施設の整備検討が俎上に載っている。市民協働の在り方や次世代育成の仕組み、多様な世代の「居場所」機能などについても、大変示唆に富む視察であった。

※視察の資料等については、議会事務局に保管してあります。